

97

谷宗虔著

支那事變と

支那人の陰謀

10銭



緒言

支那事變と、そのかげに躍るユダヤ人の陰謀とを、なるべく平易に、なるべく簡単にのべて、廣く一般の方々に讀んで頂きたいと考へ、筆を執つたのが本書であります。

それでも、書いてゐるうちに、段々と用語が六ヶしくなつて參りましたが、一つは翻譯文の中にはさまなければならぬのと、一つは思想問題、宗教問題にふれて行かねばならぬため、止むを得なかつたことを、御察し願ひたく存じます。

この書が支那事變に對する認識を幾分でも深めることが出來、東洋の平和と世界人類の幸福とに向つて、何等か貢獻することが出來るならば、筆者は實に望外の光榮と存じます。

昭和十二年晩秋

筆者謹識



目次

- 一、支那事變はなぜ起つたか……………一
- 二、支那に排日抗日をやらせる者は何か……………五
- 三、ユダヤ人の陰謀とはどんなものか……………七
- 四、ユダヤ人の秘密會議(その一)……………一一
- 五、ユダヤ人の秘密會議(その二)……………一四
- 六、シオン議定書とはどんなものか(その一)……………一八
- 七、シオン議定書とはどんなものか(その二)……………二二
- 八、シオン議定書とはどんなものか(その三)……………二五
- 九、ユダヤ人とは如何なる民族か……………二九

十、ユダヤ民族の迷信	三二
十一、ユダヤ人の陰謀は果して達成するであらうか	三七
十二、ユダヤ人を救ひ得る者は誰ぞ	四一
十三、結語	四四

支那事變と猶太人の陰謀

安 谷 宗 虔

一、支那事變はなぜ起つたか

昔むかしから『遠とほくの親類しんるいよりも近ちかくの他人たにん』といふ諺ことわざのある通り、何事なにことにつけても、隣となり近き所じよといふものは實じつに大切たいせつであります。

日本にっぽんと支那しなとは隣となり同志どうしであるのみならず、人種じんしゆも同じ黄色きいろい人種じんしゆであり、文字もじも同じ文字もじを使つかつてをり、道德だうとくの觀念かんねんも、宗教しうけうの信仰しんかうも、支那しなと日本にっぽんとは昔むかしから共通きうつうのところ甚はなだ多おほいことは皆みなさんが御承知ごしやうちの通りであります。

日本にっぽんに於おける近代きんだいの文明ぶんめいは、申まをすまでもなく、歐米諸國おうべいしよこくから輸入ゆふにゅうしたものが多おほいのでありますけれども、日本古代にっぽんこだいの文化ぶんくわといふものは、殆ほとんど全部ぜんぶ支那しなから傳來でんらいしたと申まをしてもよい

位^きであります。

それ故^{ゆゑ}に、吾^{われ}々は支那^{しな}に對^{たい}して非常^{ひじょう}な親^{おや}しみを感^{かん}じてゐるばかりでなく、昔^{むかし}の文化^{ぶんか}の親^{おや}として、支那^{しな}に對^{たい}する尊敬^{そんけい}と感謝^{かんしゃ}の念^{ねん}をも禁^{きん}じ得^えないのであります。

しかのみならず、世界^{せかい}各國^{かくこく}の情勢^{じょうせい}から申^{まを}しましても、日本^{にっぽん}と支那^{しな}とは堅^{かた}く手^てを握^{にぎ}らねばならないのであります。堅^{かた}く手^てを握^{にぎ}つて、第一^{だいいち}にソビエト露西亞^{ろしや}の赤化^{せきくわ}共產運動^{くわんさんうんどう}を防^{ふせ}がなければなりません。

然^{しか}るに支那^{しな}は日本^{にっぽん}に反抗^{はんかう}するものだから、ます／＼露西亞^{ろしや}の共產黨^{くわんさんたう}につけてまれて、どう／＼共產黨^{くわんさんたう}と手^てを握^{にぎ}らねばならないことになつたのであります。共產黨^{くわんさんたう}と手^てを握^{にぎ}れば握^{にぎ}る程^{ほど}、ます／＼日本^{にっぽん}と戦^{たたか}はなければならぬといふ事^{こと}になるのは明^{あきら}かなことであります。

御承知^{ごしち}の通り、赤露^{せきろ}の共產運動^{くわんさんうんどう}といふものは、單^{ただ}に日本^{にっぽん}の敵^{てき}であるばかりでなく、實^{じつ}に世界^{せかい}各國^{かくこく}の敵^{てき}であり、ユダヤ人^{じん}以外^{いごわい}の人類^{じんるい}全體^{ぜんたい}の敵^{てき}であります。

その様な赤化^{せきくわ}共產^{くわんさん}のロシア^{ろしや}と手^てを握^{にぎ}つてまでも、日本^{にっぽん}に反抗^{はんかう}してゐる所^{ところ}の支那政府^{しなせいふ}は全く正氣^{せいき}の沙汰^{さた}ではありません。

日本と支那と堅く手を握らねばならないといふに就ては更に第二、第三の理由があるのであります。

その一つは亞細亞洲をして眞にアジア人の亞細亞たらしめるために、日本と支那とは堅く手を握らねばなりません。

次には世界人類の三分の一にも足らない白人が、世界陸地の三分の二以上を占領して、吾有色人種を壓迫し、廣く陸地が澤山あいてゐるのに、吾有色人種を入れないといふ、不合理極まる現在の状態を一日も早く改善しなければなりません。

されば同じ有色人種として、兄弟同様の日本と支那とが喧嘩をすべきものではないのであります。

然るに何ぞや、支那を統轄してゐる所の蔣介石は、二十年來、日本を目の敵にして、小學校の教科書にまで、日本人を排斥せよ、日本に反抗せよと書きたてゝ、世界の教育史上に、未だ曾て類例のない無禮千萬な教育方針をとり、我大日本帝國に對して、有らん限りの侮辱を加へて來たのであります。支那人の中でも、物の道理のよく分つた人達は、日本と手を握

らねばならないといふことを、しみじみ感じてゐるのでありますけれども、蔣介石は、さういふ親日派の人々をば或は押し込めたり、或は殺したりして、手も足も出ないやうにしてゐるのであります。

我日本は、どうしても支那と手を握らねばならないといふことを深く知つてゐるから、二十年來、堪忍に堪忍をかさね、支那政府の間違つた考を直すように、隨分骨を折つて來たのでありますけれども、頑迷不遜の支那政府は、少しも反省しないのみならず、ますますつて上つて、日本に反抗し、日本を侮辱することが、いよいよ甚だしくなつてきたのであります。而して、昭和十二年七月七日、蘆溝橋に於て、我が駐屯部隊に對し、支那兵が不法射撃を敢てし、その後も各所に於て、我が駐屯部隊に對して、しばしば不法挑戰をくりかへしたので、我國もとうとう堪忍袋の緒が切れると共に、支那政府の分らず屋をうちのめし、その曲つた根性骨を叩き直してやらなければ、どうしても駄目だといふ事になつたのであります。されば、今回の事變は、日本帝國の自衛の上からも、支那の民衆を本當に救ふ上からも、東洋の平和と安定を計る上からも、全く止むを得ないことで、どうしても、排日抗日をや

めるまで、支那軍閥をたゞきのめさなければなりません。

二、支那に排日抗日をやらせる者は何か

蒋介石を中心としてゐる所の、支那の軍閥政府が、なぜ排日抗日をやるのかといふと、一つはそれによつて、支那の國內を統一しやうといふための手段であるといふ見られてゐるが、いま一つは、陰に陽に支那を煽動して、排日抗日をやらせる不都合千萬な者がある。それは歐米の財閥と、ソビエト露西亞の共産黨である。

財閥といへば資本家である。共産黨といへば社會主義者であり、無産運動者であり、労働者である。共産黨は資本主義に反對して、労働運動をやつてゐる。ストライキをやり、サボタージュをやるのは共産黨である。

共産黨と財閥とは正反對の立場にあるやうに見えるけれども、その實は一つ穴の貉である。左の手は共産黨となつて、労働運動をまきおこし、世界中いたるところで労働者をおだてあげて、種々な爭議をやらせ、右の手は大資本家となつて、世界中の資本の八割以上を占

め、世界各國の經濟界を自由自在にかきまわしてゐるといふ、不思議な化物がある。その化物の正體をしらべて見るとユダヤ人である。

イギリスの財閥もユダヤ人である。アメリカの財閥もユダヤ人である。その中でもイギリスのユダヤ系財閥は上海を中心として、支那の金融機關を握つてゐる。即ち支那に於けるおもな銀行はユダヤ人がやつてゐる。支那の政府に金を貸してゐるのもユダヤ人である。大新聞の發行もユダヤ人の力によつて行はれてゐる。そのほか、ガス、電燈、水道、軌道、などの公共事業にまでユダヤ人がその手をのばし、上海を經濟的に殺すも活かすも、ユダヤ人の自由であるといふやうな工合になつてゐる。

彼等ユダヤ人の支配の下に動いてゐる所の軍器商や、新聞記者などは、これまでしきりに支那の抗日熱を煽つてきたし、現在に於ても亦さかんに抗日をリードしてゐるものと見なければならぬ。

ユダヤ勢力の他の一面、即ち左の手は支那の下層階級に向つて、赤化主義の宣傳をやり、帝國主義に反抗せよと叫び、更に日本帝國主義に反抗せよと叫び、遂に帝國日本に反抗せよ

と叫ぶに至つたのであります。

今や、支那政府はソビエト露西亞と手を握り、最後の抗日をやらうとしてゐるが、露西亞を食つたユダヤの思想部面たる共産主義は、今また支那を、何よりの餌食として、その赤い舌をひろげてゐる。日本で之を防がなければ、支那はロシアに食はれてしまう。

ロシアが支那を食つたが最後、すぐさま日本を食ひにかゝるは、あきらかなこと。すでに日本を赤化しようとして、多額の共産運動費を使つて、十數年來、しきりに、日本國內に社會主義者を製造し、各方面に勞働運動をまき起して居るではないか。

支那をおだて、日本に反抗させるものはユダヤ財閥とユダヤ共産黨である。その代表的の國がイギリスとロシアである。イギリスとロシアが事々に日本に反對して、支那軍閥をたすけるのは、この建前からである。

三、ユダヤ人の陰謀とはどんなものか

ユダヤ人はその祖先アブラハム以來、今日まで凡そ四千年も経ちますが、その長い間、一

貫して一つの大それた陰謀野心を抱いてゐるといふ、他に類例のない民族であります。その陰謀野心とは何であるかといふと、全世界を掠奪して、それを悉くユダヤ人の物にしてしまひ、他の人間を悉くユダヤ人の奴隸として、牛馬同様にこき使ひ、ユダヤ人の言ふことを聞かない人間は、之を虐殺してしまはうといふタクラミであります。

このタクラミを成功させる目的で、破壊的思想を、世界各国の間に根氣よく宣傳し、破壊的工作を實に巧みに計畫實行してゐるのであります。

この陰謀が何れの時代から仕組まれたかといふことは、それが陰謀であり、秘密工作であるから、勿論はつきりいたしません、餘程古いものであるに相違ない。

そして彼等の陰謀は親から子に引きつがれ、先輩から後輩に引きつがれ、研究に研究を重ね精練に精練を加へ、着々これを實行し、いよいよ大成するに至つて、機運の熟するを待ち、全世界のユダヤ人秘密同盟を結成するに至つたものと見なければなりません。

今から六、七十年前、ジョン・レドクリフ博士が、『セダン迄』と題する書物を公にした。この書物によつて、ユダヤ人の陰謀がはじめて世間に知れたのであります。博士のこの

著書は世界各國の言葉に翻譯されたので、バツと一時に世界中へ知れ渡つて、大變な問題になりました。そのためにクリフ博士はユダヤ人から憎まれて、どうとう不幸な最後を遂げられたのであります。

次にこの陰謀の筋書とも申すべき『シオン議定書』といふものを摘發したのは、白系露人セルゲー・ニルスであるご申すことであります。

そして我日本へこの『シオン議定書』を紹介した人は北上梅石氏であります。同氏は大正七年の暮にロシア人メルコルフからそれを手に入れて翻譯し、それを日本に送つてよこしたのであります。これが日本に於て、ユダヤ人の陰謀を曝露した最初のものだと申すことであります。

かくの如く、一度世間に發覺したにも拘はらず、『シオン議定書』を偽作として信じない者もあり、あまり穿ちすぎた話だとして冷淡に看のがす者もあり、何に大丈夫だそんな陰謀が成功するものか。(斯様な辯護宣傳も、世界輿論の大綱を握つてゐるユダヤ人にはお手の物であるといふことを注意せねばならない。)など、高をくゝつてゐる者もあるが、油斷は最も恐

るべき大敵であります。

世界に於ける赤化思想の宣傳は勿論、彼等ユダヤ人の計畫に基くところの種々な社會運動が、『シオン議定書』の筋書通りに、着々各所に實現することを想ふ時、實に恐るべき陰謀であるといふことを痛感するのであります。

試みに近代現代の思潮を御覽なさい。

第一、金力萬能主義に傾いたこと

第二、家族主義を輕んずるに至つたこと

第三、平等思想がはびこつて來たこと

第四、勞働問題がやかましくなつたこと

第五、享樂淫靡の風が増長したこと

これ等が悉く『シオン議定書』に於て、ユダヤ人の計畫として、記録されてあることを知るならば、如何に無頓着の者と雖も、これはと氣が付く筈であります。

今の中にフンドシを締め直して、大いにその對策を講じなければ、大變なことになりはし

まいかと思はれます。

四、ユダヤ人の秘密會議（その一）

西曆一千八百六十年（昭和十二年より七十七年前）、巴里に於て開かれた『眠れる者を醒ます結社』と稱するものが、全世界のユダヤ人が同盟を結んだ最初の秘密結社である。

この會合に於ける議事録は、全世界のユダヤ人に配布された。この會合の演説の中で、ユダヤ人アドルフ・クレミエの演説要項をぬき書きして見ると、大體次のやうなものであります。

『吾人が茲に創設せんと欲する同盟は、フランス人同盟でもなく、イギリス人同盟でもなく、又、スイス人、ドイツ人等の同盟でもない。實にユダヤ人の全世界同盟である。』

ユダヤ人の信仰する、靈智の唯一神教たるユダヤ教が全世界にその光輝を發し、キリスト教徒及びマホメット教徒がユダヤ教に屈服するまでは、悉く彼等を敵として親交を許さない。彼等はユダヤ人の權利と利益とに對して敵對心を抱き、ユダヤ教に反抗する者で

ある。

吾人は先づ第一にユダヤ人であり、且つユダヤ人として存在することを欲するものである。ユダヤ人の國粹の精華は一つにユダヤ人の父の宗教（ユダヤ教）である。即ち吾人は如何なる政權をも認めることは出来ない。吾が民族は常に外國に生活してゐるのであるが、吾人は異國人の輕薄なる欲望の前に御機嫌とりをするやうな馬鹿なことは出来ない。吾が民族の威力は宏大なるものである。吾人はこの威力を以て吾人の事業に適用すべく研究しやうではないか。吾人には何事も恐るゝ所はない。地球上に存する一切の富を、ユダヤ人の所有とする日は、いよく近づいたのである。

然り、若しも黄金が世界第一の力であるならば、出版物は正に第二の力である。出版物の助力を缺いてはこの大會に於て縷々述べられた各種の考案も、協議も、凡て何等の意義をなさないことになる。出版事業を吾人の掌中に收めた時、初めて吾人の目的を達することが出来ゝ。吾人は須らく日常の出版物を指導すべきである。……又、輿論、巷間の文藝及び芝居を製造するため、吾々に大政治新聞が必要である。之を利用して……。

吾人が掌中にある出版物を利用して、吾々は不正なものを正當とし、不名譽な事を名譽とすることが出来る。……吾々は物事を有名なものにすることも、之を侮辱してつまらぬものにすることも、思ひのまゝである……。非ユダヤ人は見たところ虎のやうだが、心は羊のやうで、誠に輕卒極まる人民である……。』

これ等の演説の後、同盟代表モーゼス・モンテ・フィオレは、更に次の要旨を演説した。
『吾人は何よりも先に、出版界の權能をユダヤ人の掌中に收めねばならぬ。諸君が徒に貿易及び資本、その他のものを壟斷せんとしつゝあるも、これ等の努力たるや、全く徒勞の業である。吾人が全世界の言論を自由に操縦し得んがために、世界中の凡ての出版事業を吾人の掌中に收めなければならぬ。それまでは吾人の統括權に關する理想は、妄想として存在するに過ぎない……。』

斯様な秘密會議が行はれたのでありますが、實際、世界の有力な新聞社、雜誌社などには、それ／＼ユダヤ人一味の同類を入社せしめ、或はユダヤ人直接に言論機關を設備してをります。彼等は巧みに輿論をデッチあげますから、有力な新聞雜誌の言論だからといふても、う

かつに信用できません。

五、ユダヤ人の秘密會議（その二）

西曆一千八百六十九年（昭和十二年より六十八年前）、オーストリア國境のブラーク市に於て、ユダヤ民族有志の秘密演說會が開かれました。その演說會の要點は次の如きものであります。

一、世界の黄金を出来るだけユダヤ人の手に占有すること。その黄金は有らゆるものを購求することが出来、如何なることをもなし得る。

二、印刷事業を専有すること。その手段によりて、非ユダヤ人を墮落させ、馬鹿と化し、且つ騒亂をひき起させることが出来る。

三、自由思想、懷疑説を非ユダヤ人に宣傳し、及び、キリスト教破壊の目的を以て、墮落の觀念を非ユダヤ人にうる付けること。

四、キリスト教宣教師に對する戦争をまき起すこと。及び、宣教師に嘲笑、誹謗、並びに

疑惑を蒙らせること。

五、キリスト教徒の學校に於ける神學教授を廢すること。

六、教會所有の財産を取り上ぐる運動をなすこと。

七、家族主義を破壊すること。

八、愛國心を養成して、王座の守護となる所の陸軍を廢滅すること。

九、陸軍嫌ひの人民中に、軍備反對の觀念を益々煽動勃興せしむること。

十、非ユダヤ人の爲め、國債及び私債を募集することを容易ならしめること。これは即ち

彼等に對する便利な良である。

十一、取引所を盛んにすること。取引所は非ユダヤ人を投機に引き入れ、財産を大資本家

の手に移すよき手段である。

十二、非ユダヤ人の不動産を破壊し、凡ての土地をユダヤ人の手に移すことの必要なるこ

と。

十三、手工的職業に換ゆるに、大資本の製造工場を以てすること。

十四、ユダヤ人は貿易及び投機業を確實に掌握せねばならぬ。農村及び村落經濟を吾人の掌中に握るため、特に酒精、穀物、油類、絹の貿易及び投機業を確實に吾人の掌中に保持すること。

十五、ユダヤ人のために、あらゆる官職に就く道を開き、そして國家の立法中に加はること。

十六、ユダヤ人に反對する法律を廢滅すること。及び特にユダヤ人に利益をもたらず法律を制定すること。

十七、ユダヤ人は古來よりの仇敵たるキリスト教徒の財産、健康及び生命を吾人の掌中に握るため、醫者及び辯護士の職に就くこと。

十八、非ユダヤ人中に勞働階級の發達を圖ること。

十九、あらゆる革命を援助すること。何となれば、これは吾人の資本を増大し、而して吾人を目的に接近せしめるものである。

二十、全世界に波動しつゝある社會運動を指導すること。及びユダヤ保守主義を堅固に維

持すること。

以上はブランク演説の太要でありまして、之に次ぐに左の五項が結論として示されました。

一、若しもユダヤ人が、この會の決議に従ふならば、數百年の後、吾々の子孫は、本同盟創立者の墓に到り『イスラエルの民（ユダヤ人）に與へられたる誓約が實行せられ、吾人は實際に世界の王侯となつた』と報告するであらう。

二、他の國民は漸次ユダヤ人の奴隸となるであらう。この目的を速かに達成するために、みづから社會運動の味方と詐り、貧困者の運命改善を課程としてゐると稱することが必要である。實際に於て、吾々は輿論の推移の支配及び掌握に努力することを爲さねばならぬ。

三、民衆の盲目なること、及び彼等の空虚にして音ばかり高い雄辯を好む性癖は、吾々の人氣並に信用と相俟つて、民衆を誘惑する兩刀の武器である。

四、吾々は目的を達成するために、或る程度まで勞働階級を使護することが必要である。かくの如く行動すれば、吾々は希望通り、民衆を挑發することが出来る。

五、吾々は革命のために、武器として民衆を使用しやう。革命ある毎に、吾人の事業は成功に近づき、地球上統御の目的は速に達成するのである。

讀者諸君がこれを読んで、近代現代の世相と比べて見るならば、思ひあたるふしが数々あるであります。相共に自重して、彼等の術策に陥らぬやう注意しなければなりません。

六、シオン議定書とはどんなものか(その一)

シオンといふのはユダヤ人が最も神聖な場所と信じてゐる所の、エルサレム城内の小山の名であるといはれてをります。而して『シオン議定書』(プロト・コール)といふものは、露國人セルゲイ・ニルスが四回に亘つて出版したもので、ユダヤ人の世界的掠奪、破壊を遂行する方法手段を、ユダヤ民族が講究した記録であります。

西暦一千八百九十七年(昭和十二年より四十年前)、スイスのバーゼル市に於て秘密に開かれた第一回シオン會議の議事録が、即ち『シオン議定書』と稱するものであります。

執筆者は露國に生れたユダヤ人、アスヘル・ギンツベルングといふ者で、非常な天才的の

人物であり、又、各國革命煽動家であつたと申します。

この議事録は前後二十四回に亘る集會の議事録で、甚だ大部のものであり、且つ慎重審議を重ね、十分にねり上げたものだといはれてゐる。

以下少しく『レオン議定書』について述べることにする。

自由平等の術策。

議定書第一項に曰く

『古き昔に於て、人民の中に、自由、平等なる言葉を叫んだのは、吾々が抑々最初のものである。それ以來、この言葉は到る處から、この誘惑に向つて飛んで來た所の、無自覺な鸚鵡に依つて常に繰り返された……。』

『いかにも惻巧らしく見える知識階級の非ユダヤ人は。……この言葉の矛盾と調和とを發見し得ない。又天然には平等なく、天然それ自身が智能、性質、才能等の差別を成し立て居つて、天然自然の法則には必ず服従すべきものであることを知らない。』

『自由平等なる言葉は、……到る處の平和、安寧、協同一致を滅却し、非ユダヤ人國家の

凡ゆる根底を破壊し、以て非ユダヤ人の幸福を喰ひ盡すところの蛆虫である。是が吾人の勝利に役立つたといふ結果を諸君は將來見るであらう……。』

自由平等の思想がいかに世界各国の社會を惡化させたかは、今日では明瞭である。日本でも明治維新以來、洋行がへりの連中が、しきりに自由平等をふりまはしたが、今日から見るとそれは、ユダヤ人の良にうま／＼とひつかゝつたものであつた。

議定書第三項に曰く

『自由なる言葉は、人間社會を驅つて、あらゆる力、あらゆる權力、果ては神様や自然力に對してさへ抗爭せしめるに至るものである。自由を極端にゆるせば、群眾は變じて血を好む猛獸となるのが、動物學の原則である。されば吾人が君臨した曉には、自由といふ言葉を人間の辭書から除かねばならない……。』

今日のソビエト露西亞を御覽なさい。民衆に自由などいふものは爪の垢ほどもない。その日／＼の食べ物すらあてがい扶持で、それも甚だ不十分で、民衆は毎日食つたり食はなかつたりしてゐる有様である。専横、壓制のかぎりをつくしてゐるのが、今日の共產黨ロシ

アであるといふ事實を御覽なさい。

議定書第十項に曰く

『吾々が自由といふ毒藥を國家機關に注入した結果、その全政體に變化を來たし、世界各

國は死病即ち壞血病に冒され、今や斷末魔の苦悶を待つばかりである……』

フランスの革命をはじめとして、各國は何れもこの自由平等の思想にわざはいされて、次

から次と革命をひきおこし、次第に共和政となり、僅かばかり残つてゐるところの君主國も、

段々その影がうすくなるといふ今日の世界に立つて、いよく益々光輝を放ちつゝあるは、

獨り我大日本帝國のみであります。彼等ユダヤ人の陰謀に對する最も大なる障礙物は、實に

我大日本の國體であるといはねばならない。

日本に自由思想が輸入されたのは、キリスト教徒の仲つぎによるものが多い。今日以後に

於ても同じ事情が相當につゞくものであらう。然しながら我國には古來、幾多の外來思想を

悉く溶解して、その毒を無害ならしめ、更にそれを滋養分として吸收するといふ、不思議

な力が先天的に存在してゐる。是の不思議な力を今後ますます旺盛にするといふことが何よ

り必要であります。

七、シオン議定書とはどんなものか(その二)

政事上の術策

議定書第一項に曰く

「獨り獨裁君主の行ふ計畫のみが、國家機關の全部に按排して秩序を保ち、宏大にして且つ明朗なものに仕上げる事が出来る。従つて國家の目的に適合する政事は、責任ある一人の掌中から出なければならぬ。……文明は群衆が導き出したものでなく、……群衆の指導者に依つて導き出されたものである。群衆は野蠻であつて、あらゆる場合にその野蠻性を發揮する。されば群衆が自己の手に自由を握るや、群衆は自由を無政府に變化する。そしてそれが野蠻の絶頂である。」

ユダヤ人は世界攪亂の目的で、種々な學理學說を捏造し、宣傳するけれども、彼等の政事に關する本當の意見は、君主獨裁政治が最上のものであるといふ本音を吐いてゐることは

右の通りであります。

議定書第五項に曰く

「吾人は非常に強力なものである。……彼等は吾々を除外することは出来ない。各國は陰

に陽に吾人が参加すること無しに、些細な個人的協約さへ成立不可能である……。」

「自由行動より生ずる努力は、他の自由遭遇してその力が衰退し、こゝから重大精神的

打撃、失望及び失敗が起る。この方法を以て非ユダヤ人を疲勞困憊せしめ、世界のあらゆる

國家的勢力を完全に吾人の手に收め、そして最高政府を創設し得る國際的主權を、吾人

に提供するの餘儀なきに至らしめる。そして現在の爲政者の代りに、最高政府行政廳と名

づくる怪物をこしらへるのである。それは各國民を統御せすんば止まない程の尨大な組織

を持つてゐて、ダニのやうに其の手を四方八方に延ばすであらう……。」

近年、國際的の種々の會議や、種々の機關が設けられることが流行するのは、ユダヤ人の

怪物製造の仕事であるといふことが出来る。これ亦、警戒を要する問題である。

世界掠奪の陰謀

議定書第五項に曰く

「吾々は全世界に王たるべく、神自身に選ばれたる者である、豫言者は吾人に言ふてゐる。神は吾人がその任務を遂行するため、吾々に天才を賜はつた。たとへ敵の陣營に非ユダヤ人の天才があつて、吾人に打ち勝たうとしても、新參者は古參の者に及ぶものではない、兩者の間に、世界が嘗て見ない戦鬪が起り、彼等非ユダヤ人の天才は敗北するであらう。」

議定書第十一項に曰く

「神は吾々神選の民を流浪せしめたが、この表面的弱點の凡ての中に、吾人の全力が含まれをり、この力が現に吾人を世界主權者の境地に導いたのである。今や吾々は、築き上げた土臺の上の工事が、もう僅かに残つてゐるばかりである。」

「非ユダヤ人は山羊の群で、吾人は彼等に取つて狼である。だが諸君、狼が羊小屋の中へ泥棒に入る時は、羊と一緒に居ることを御存じか……。」

かくの如く、ユダヤ人は神の選民であるといふ迷信を以て、世界掠奪の執念深い夢を見て

ゐるのであります。彼等に天才的の智能があることは認められるけれども、殘虐非道、傲慢不遜で、恰も野獸の如く、全く徳性を缺いてゐるから、彼等の惡夢はとても成功はしまいかれども、油斷してゐたら、彼等のためにヒドイ目にあはされるであらう。

八、シオン議定書とはどんなものか(その三)

民衆煽動の策謀

議定書第三項に曰く

『權利によつて勞働者の勞力を利用してゐる非ユダヤ人の貴族は、勞働者が滿腹であり、健康であり、頑丈であることを望んだが、吾々は之と反對に非ユダヤ人の廢頽をよるこぶものである。吾人の權力は勞働者の榮養不良、身心衰弱に存するのだ。なぜならば、之によつて彼等を吾々の思ひ通りにすることが出来るからである……。』

これは勞働者と資本家とを互に争はしめ、勞働者をして榮養不良に陥れ、同時に資本家の實力をユダヤ人が獨占しやうといふ策略をのべてゐるのである。

實際、勞働爭議は事業の衰微を目的とし、事業の沈退を企てるもので、尤もらしい經濟的學理の假面をかぶつてゐるが、結局勞働者を喰ひ物にするものであります。

議定書第十五項に曰く

『若も世界に謀叛が起つたら、その主謀者は必ず我が忠僕中の一人である。従つてマツソンの活動を指導するものは、吾々以外にはないといふことは自然なことである。それは吾々が指導先を知つてゐる。即ち一切の行動の終局の目的を知つてゐるからである。非ユダヤ人は何事も辨へず、直接の結果さへ認識し得ない。即ち彼等はその計畫が彼等の發案にあらすして、吾々が彼等の思想を誘導して、それを發案せしめたものであるといふことさへ氣が付かない……。』

フランス革命を御覽なさい。全くユダヤ人の策謀であつた。南亞戰爭をひき起したのもユダヤ人である。歐洲大戰を捲き起したのもユダヤ人である。そしてロシアを奪つたのもユダヤ人である。

マツソンといふのは世界的の陰謀秘密結社であつて、初めはユダヤ人をその結社員に入れ

なかつたが、多年の間に於て、遂にユダヤ人に乗り取られたのであります。今ではユダヤ人のために唯一の秘密結社となつてゐるのであります。

マツソン秘密結社の手段としては、壓制、偽善、買収、瞞着、背信、あらゆる惡辣な方法を以て、その目的を達せんとするものであります。この結社は全體ユダヤ人のみが中心となつて、獨斷專制に事を行ひ、反する者には直ちに死を以て報ゆるといふ仕組で、暗殺は彼等の最も得意とする所のものであります。

偽學理宣傳の術策

議定書第二項に曰く

「諸君、吾人の斷言を根據なきものと思ふ勿れ。吾人の仕組んだ、ダルウイニズム、マルクスニズム、ニツシエイズムの成功に注意せよ。是等の主義が非ユダヤ人の人心に及ぼす破壊的價値は、すくなくとも吾人に取つては明瞭ではないか。

議定書第九項に曰く

「吾人は吾人に解り切つてゐる虚偽の學理や主義を、非ユダヤ人の青年に宣傳教育し、之

を馬鹿にして引き廻し、墮落させた……。』

ユダヤ人マルクスが、世界の思想を惑亂させる目的で、經濟上の理窟を譯の解らぬやうにデツチ上げ、いかにも高遠な哲理でもあるかのやうに偽裝してゐるのが資本論等の書物である。學者が馬鹿の標本だといはれるのは、こんなものにだまされて、輕舉妄動をするからである。

議定書第十二項に曰く

「無論憲法の存在する間ではあるが、吾々の諸新聞は、貴族主義、共和主義、はては無政府主義と、色々な傾向を取る。……此等の諸新聞は恰も印度の神様ウイシウスのやうに、百本の手を有してゐて、それ／＼の手が社會の任意の輿論の脈を取るのである。それで脈搏の昂進した時に、此等の手は吾人の目的の方へ輿論を指導する。それは混亂した人心は、判斷力を失つて、煽動され易いからである。此等の馬鹿者共は自黨の新聞が輿論を主張してゐると思ふてゐるが、その實吾人の輿論や希望を主張してゐるのである。又彼等は張してゐると思ふてゐるが、その實吾人の輿論や希望を主張してゐるのである。又彼等は自黨の機關紙に追從してゐると思ふてゐるが、その實、彼等に吾人の立てた旗を持たせて、

前進させてゐるのである……。』

外字新聞などを讀む人々は、特に注意しなければならぬことと思ふ。又、それ等を日本の新聞に轉載したり、紹介したりする時も、餘程注意を要するものと思ふ。勞働問題、普通選舉、多數決、自由主義、軟文學、國文學、國際問題等が、彼等ユダヤ人の魔手によつて、如何にあやつられつゝあるかといふことも、明かでありませう。

九、ユダヤ人とは如何なる民族か

かくの如く世界攪亂を企て、世界掠奪を企願するユダヤ人とは抑々いかなる民族であるか、その大要を簡単にのべることにいたします。

ユダヤ民族は、今から凡そ四千年ばかり前に、アブラハムを祖先として興つたものであります。アブラハムは、ベルシャ灣の西北にあたるスメリアの地に生れましたが、生活難のために、あちこちと天幕旅行をしてをりました。

その後、エジプトに行つて暫く居りましたが、アブラハムは遂にエジプトにも居られなく

なつて、再び各地を流浪し、一生の間、安住の地を得ず、幾多の辛慘を嘗め、百七十五歳で死亡したと申します。

アブラハムが九十九歳の時、エホバの神と契約を結び、大いに子孫を繁殖し、アブラハムをユダヤ民族の父と稱し、エホバの神は永遠にユダヤ民族の守り神になることに決定し、この契約のしるしとして、ユダヤ人は割禮を行うといふことになったと申します。

割禮といふのは、生殖器の皮を割るのださうであります。この割禮によつて他民族と混同することを避けて居るのであります。

その後になつて、アブラハムの子孫が數百年間、エジプト生活をしたこともありました、モーゼの時代になつて、エジプト民族と争ひを生じた結果、エジプト安住の夢は再び破れ、ユダヤ人の男子がエジプトに居ようものなら、片つ端から殺されてしまふ時代になりました。

そこでユダヤ人の族長モーゼは、一族郎黨六十萬人の大勢を率ゐ、四十年間流浪生活をつづけてゐたのであります。

その間、エジプトからは追撃が来る。各地からは蠻族が襲撃して来る。食糧は缺乏する。

水は無くなる。時には仲間われがする。その間に於て同族の結束を固め、外敵と戦ひ、氣候

風土と戦ひ、あらゆる辛酸をなめ、困苦缺乏に耐えて來たのであります。

その堅忍不拔の精神的根底は何であるかといへば、エホバに對する熱狂的迷信以外に之を見出すことは出来ないであります。

迷信でも凝りかたまると、ある意味に於て偉いものである。況んや正しい信心に於てをやと、言はざるを得ないのであります。

さて、アブラハム以來、四千年に亘り、ユダヤ民族の上に、一貫してつゞけざまに襲つて來たのが、天然自然の迫害と、人爲的の迫害であります、中について、モーゼ四十年間の流浪生活は、實に惡虐に反抗するに惡虐を以てした所の、惡虐の試練であり、惡虐の飛躍でありました。この四十年間は、さながらユダヤ民族四千年の縮圖であると申してよいのであります。

されば、これによつてユダヤ民族の思想が頗る陰險となり、且つ執念深くなつたものであ

りませう。そして、四千年來一貫して世界掠奪を意願し、破壊的思想を世界各國の間に根氣よく宣傳し、破壊的工作を實に巧に計畫實行するに至つたものと思はれるのであります。

今や、イギリス、フランス等の財界や政界に於て有力な地位を占め、それ等の國を動かしてゐるのは、主にユダヤ人であります。アメリカに於ても亦同様で、アメリカ財閥の主なものはユダヤ人であり、歴代の大統領中、約三分の二はユダヤ人であります。ユダヤ人が英、米、佛等に於て如何に有力な地位を占めてゐるかは、實に驚くべきほどであります。

ソビエト露西亞は今や全くユダヤ人の獨裁專制の國となつてをります。その他、支那をはじめとし、世界各國に、その魔手をのばし、或は經濟的に或は思想的に、着々として深く各國の心臓部へ喰ひ入りつゝあるのがユダヤ人であります。

而して金匱無缺の我大日本帝國に向つて、その魔手をのばさんとするが如き不逞極はる策謀を敢てするに至つたのであります。

十、ユダヤ民族の迷信

ユダヤ人はユダヤ教と稱する迷信邪教を深く信じてゐるのであります。ユダヤ教といふのはキリスト教の親元で、太古未開の野蠻人の迷信、妄想、妄念、妄執の丸出しで、とてもお座敷へは出せない惡徳の標本であります。

エス・キリストもユダヤ人であつたけれども、ユダヤ教の神なるエホバがあまりに偏愛、横暴の邪神であつて、ひろく世界に通用しないといふ所に目をつけて、キリストはユダヤ教を焼き直し、偏愛の神エホバを追ひ退けて、博愛の神ゴットに仕立て直したのであります。

元來、ユダヤ教はユダヤ人のために都合よくデッチ上げなければならぬ必要があつたのであります。それゆゑに、エホバの神は、どこまでも、他の民族を惡み、ユダヤ人だけを愛する偏愛の神であるといふやうに仕組んだのであります。

凡そ神様といふものは、正直とか、正義とか、公明とか、仁慈とかいふやうな立派な徳を具へてゐるものと、吾々日本人は考へてゐるが、エホバの神は全くその反對で、破壊、掠奪、嫉妬、怨恨、強慾、呪咀といふやうな、あらゆる惡徳を具へて、暴威を振ふといふことになつて居ります。さればエホバを神といふよりも、寧ろ惡魔と呼ぶ方が適當であるであらう。

是の如き惡魔なるエホバを信するユダヤ人が、惡魔に等しい性質となり、世界各國を顛覆し、世界中を掠奪しようといふやうな、恐ろしい陰謀を企てるに至つたといふことは、敢て不思議ではありません。

エホバの神が天地萬物を造つたなどいふことが、全く野蠻人の迷信であり、妄想であることは申すまでもない。之に類する迷信は世界に於ける各民族の間に、殆ど共通のものであるから、之を單に神話としてアツサリ取り扱つてゐるならば、敢て咎める必要もないが、かかる迷信妄想を根據として、選民思想を生じ、それを妄信妄執して、世界掠奪の陰謀を企てるに至つては、世界人類のために斷じて許す可からざるものであります。

ユダヤ人の迷信妄執を詳細に記してあるのがいはゆる舊譯全書であります。かゝる邪教書を聖書と稱するはユダヤ人の勝手であるが、非ユダヤ人たる歐米の白人が、二千年來、同じく之を聖書と稱し、アーメンと天を仰いで隨喜讃歎して來たのは何といふ醜態であらう。歐米人の頭が精神問題に對して、如何に粗雑であり、空虚であり、低級であるかといふことは、東洋の宗教を參究し體驗した者から見ると、實に笑止千萬といはねばならない。

エホバ言ひ給ひけるは『我はエホバなり、我の外に神なし、一人もなし、……日の出づる所より、西の方まで、人々我のほかに神なしと知るべし。我はエホバなり、他にひとりもなし。』

自分ばかり神様だとは獨斷千萬、傲慢不遜で、凡夫の標本、自我の塊りである。

念のため一言しておきますが、釋尊が『天上天下、唯我獨尊』と叫ばれたのは、『何人も天上天下、唯我獨尊の自己なることに目醒めよ』この警告であります。されば涅槃經には『一切衆生、悉く佛性あり』と説かれ、華嚴經には『奇なる哉、奇なる哉、一切衆生、みな如来の智慧徳相を具有せり』と示されたのであります。言葉の表面が聊か似て居つても、その精神は全く天地雲泥の相違であるといふことを御注意申しておきます。

エホバ言ひ給ひけるは『汝我面の前に、我の外何物をも神とすべからず、……之を拜むべからず、我エホバ、汝の神は嫉む神なれば、我を惡む者に向ひて、父の罪を子に報ひて三、四代に及ぼし、我を愛し我が誠命を守る者には恩恵を施して千代に至るなり……。』
他の神を拜むなとは嫉妬の本性をあらはし、父の罪を子に報ひて三、四代に及ぼすとは、

執念深い恨みの神であります。我を愛し我が誠命を守る者には恩恵を施すといふに至つて

は、正にこれ偏愛偏頗の邪神であることを曝露してをります。

東洋の宗教は餘りに上等すぎて、かゝる迷信邪教に比すべきものでないことは勿論でありますけれども、西洋心酔病者のために、起死回生の投薬として一言いたしますと、大聖釋尊は

『十方盡虛空界一切の諸佛、尊法、並に賢聖僧に歸依し奉れ』

と教へ、

『若し人が來て、自分の四肢五體をばら／＼にするやうな、殘虐な殺し方をして、當にみづから心を擲めて、瞋り恨むこと無かるべし』

と教へ、

『常に怨親平等の大慈大悲心に住せよ』

といまして居られます。

エホバ言ひ給ひけるは、『汝が奪ひ得たる物は悉く己に取るべし、抑々汝がその敵より奪ひ得たる物は、汝の神エホバが汝に賜ふものなれば、汝これを以て楽しむべし』

これはエホバが強慾の神であり、掠奪の神であることを立證してあまりあるものであります。今これを、東坡居士が「我が物にあらざれば一毫と雖も取ることなかれ」と、赤壁の賦に歌つて居られるところの心境と比べるならば、月とスツボン程のちがひがある。

要するにユダヤ民族の信奉するユダヤ教は、野蠻人の迷信妄執そのまゝで、エホバの如きは全く妄想邪念のかたまりであります。而してこれ等はやがて、ユダヤ人の習性を物語つてゐるといはねばならない。

すなはち、ユダヤ人の習性がユダヤ教を産み、ユダヤ教がますますユダヤ人の習性を養ひ、互に原因をなし、結果をなして、今日に至つたものといはねばならない。

ユダヤ人がエホバなる彼等の迷信教を一日も早くカナグリ捨て、四、五千年の悪習性を一掃するやう、専ら努力するに非ずんば、この地上に平和を招來することは、永久に不可能であらう。

十一、ユダヤ人の陰謀は果して達成するであらうか

第九項の終りに於て一言してある通り、ユダヤ人の陰謀は既に八分通り成功の域に達して居ります。『築き上げた土臺の上の工事が、もう僅かに成つてゐるばかりである』と、彼等がいふてゐる通りであります。

然らば彼等の陰謀は果して成功するであらうか。彼等の智能と、彼等の執念と、彼等の努力とを以てすれば、彼等の陰謀も或は九分九厘まで成功するかも知れない。然しながら、九俵の功を一簣に缺いて、最後には必ず失敗するに至ることを斷言する。

何となれば、彼等ユダヤ人の目的とする世界掠奪の陰謀は全く無理な注文であり、不合理きはまる暴舉であり、神佛ともに許さざる邪見邪道であり、非理非望であるから、いかに努力しても、結極失敗に終ることを免れない。現にソビエトロシアの統治すら失敗だらけではないか。

彼等ユダヤ人が、その頭腦に於て、その手腕に於て、頗る優秀な點があることは、事實であつて、單に彼等の己惚だけではない。それは勿論神に選ばれたのではない。彼等が四千年來、他の民族から壓迫されて、刻苦精勵、奮闘努力をつゞけて來たからである。その永い間

に於て、彼等が試練を経、精練に精練を加へられて、その結果、今日の如く彼等の智能が優秀となり、世界各國の間に散在しながら、而も堂々たる地位を占めるやうになつたのであります。

『艱難汝を玉に成す』といふ。『辛苦にあはざるは不幸の人』だ。ユダヤ人が今日の如く偉大なものになつたのは、ユダヤ人を壓迫してくれた所の、幾多の民族のお蔭である。

ユダヤ人がユダヤ教の迷信妄執をかなぐり捨て、冷靜に端坐して、考一考すれば、彼等の穎智はこゝに氣が付かなければならない筈である。

さすれば、彼等が四千年間の苦難を、エホバの神の愛による試練であると信じて來たが、その所謂エホバの神とは、多年彼等を迫害してくれた幾多の民族のことであつたといふことを悟るであらう。

従つて、彼等がエホバの神に對して捧ぐべき尊敬と感謝とは、世界各國の民族に向つて、之を捧げるといふことになるべき筈である。

右の忠告に對して、一應の眞理あることは認めるであらうけれども、彼等にはまだ幾多の

凡情が動くであらう。即ちユダヤ人を迫害したといふことは、結果から見てユダヤ人のためになつてゐるさはいへ、その動機が甚だ憎むべきものであるといふであらう。

それが妄念妄執といふものだ。動機を論ずる日になると、その責任は、ユダヤ人と他の民族と半分づつ負はねばならない。ユダヤ人がユダヤ教の迷信を固執して、他の民族と調和が保てないし、同化力が缺けてゐたのみならず、殊更に調和を破り、故意に同化を避けて、他の民族を壓伏しやうとした所に、實は責任の全部があるのだ。

今、十歩も百歩もゆづつて、その責任が、ユダヤ人と他の民族と半分づつであるとしても、プラス、マイナス、イクオール、零だ。今更、動機などを論ずるのは、野暮の骨頂といふべきだ。

それでも感情が治まらないといふならば、感情は感情としておいて、理智のメスを振つて今一段と探求して見るが宜しい。

ユダヤ民族が、一対十、乃至は一対百といふやうな割合の許に於て、幾多の民族から、つゞけざまに四千年來、迫害されて來てさへ、ユダヤ人は滅びないのみならず、益々潜勢力を

養ひ得て、偉大なる今日を成し遂げてゐるではないか。

之を反對に、ユダヤ人が、世界各國の民族を壓迫し、虐殺して見た所が、誰がだまつて殺されるものか。壓迫すればする程、反撥するのが、生物界の原則だ。いや萬物に共通の原則だ。さすれば、打つたり打たれたり、打たれたり打つたり、永久に果てしのないことだ。そんな馬鹿なまねは、早く止めた方がよいではないか。

殊に、彼等ユダヤ人とは古來何等の關係もなく、従つてユダヤ人に對して、指一本もふれたことのない、我大日本帝國が亞細亞の盟主として、極東に屹立してゐることを知るならば、ユダヤ人の世界掠奪の陰謀は、ユダヤ人に取つて、全く一場の惡夢に過ぎなかつたといふことを悟らねばなるまい。

十二、ユダヤ人を救ひ得る者は誰ぞ

ユダヤ人は永い間、救世主の出現を待ちこがれてゐる。けれどもそれはユダヤ人の考へてゐるやうな、エホバの神でもなければ、エホバの神の使でもない。エホバの神に對する迷信

妄執、すなはちユダヤ教なるものを、彼等が思ひ切つて捨てゝしまはない限り、ユダヤ人は永久に救はれない。

何となれば、ユダヤ人を惡魔の如くにしてしまつたのは、ユダヤ教であり、エホバの神であるから、之と絶縁しない限りは、ユダヤ人がその惡魔の性質を脱することが出来ない。彼等が惡魔の性質を捨てない限り、永久に彼等は世界の諸民族と調和がとれない。従つて共存共榮の正しい道が歩めない。それでは何時まで経つても世界の諸民族と互にイガミ合ふだけである。それは甚だ人類全體のために迷惑千萬であると共に、ユダヤ人のためにも甚だ不幸なことである。

我が大日本帝國は全く白紙の立場から、嚴正公平に、而も深切に、ユダヤ人に對して忠告することも出来るし、又ユダヤ人の迷信妄執を奇麗に拭ひ取つてやることの出来る、世界唯一の妙藥を持ち合せてゐる。

それは即ち、神儒佛三道一貫の大道であります。この大道たるや、全くキリスト教や、フイノ教の比ではない。キリスト教はユダヤ教の子供であり、フイノ教はユダヤ教の孫で

あるといふてもよい。子供や孫の分際では、祖父母に對して彼はいふべき資格がないと同じく、キリスト教やフイ／＼教では、ユダヤ人は救はれない。

神儒佛三道一貫の大道、これこそ宇宙唯一の宗教であつて、あらゆる哲學も、あらゆる倫理學も、あらゆる宗教學も、悉く之によつて正しく導かるべきものである。

今や世界の思想界は全く混亂の状態である。キリスト教、フイ／＼教、ユダヤ教と、同じ系統の迷信教が互に火花を散らして思想戦をやつてゐる。即ち邪見と邪見の衝突であり、妄念と妄念の戦ひである。その尖端は或は經濟戦となり、或は武力戦となつて各所にあらはれるのである。

これ等の妄執戦を高所より大觀して、双方の死命を制し得る者、兩者の妄執を粉碎し得る者は、實に我大日本帝國であり、神儒佛三道一貫の大道であります。

斯様な意味に於て、ユダヤ人を救ひ、同時に世界の人類を救ひ得る者は、獨り亞細亞の盟主たる、我大日本帝國あるのみと確信して疑はないのであります。

されば、日本帝國の使命は實に重大であり、神儒佛三道に直接關係ある學者、思想家、宗

教育家の使命も亦實に重大であるといはねばなりません。

十三、結語

之を要するに、今回の支那事變は、勿論支那軍閥の排日抗日等の誤れる政策に基づくものではあるが、その裏面に於ては、英、米、佛等の財閥の魔手と、ソビエト露西亞の赤化共產の魔手とが、蔣介石の歐米依存主義の弱點に乗じて、支那全土に侮日抗日の惡思惡想を蔓延させたといふことが、その原因であるといはねばならない。

これ等の魔手は何れもユダヤ人を中心とする、排他獨榮の誤れる主義方針の產物である。その排他獨榮の民族的個人主義は、實にユダヤ教の迷信妄執といはねばならない。

この根本的の迷信妄執を打破して、共存共榮の大自然道に立ち歸らしめんがためには、先づ以て支那軍閥の抗日意識を粉碎し、日支提携の實を示し、東洋平和の基礎を確立することが最も必要であります。更に進んで神儒佛三道一貫の大道を中外に宣揚し、自他一體の眞理に立脚して、専らユダヤ人の蒙を啓き、併せて白人の民族的偏見を是正し、四海同胞の事實

に目醒めしめ、以て王道蕩々たる皇化の徳風に浴せしむることを得るに至らば、世界人類のため、實に無上の幸福といはねばなりません。

昭和十二年十一月十五日印刷納本 定價一部十錢
昭和十二年十一月十八日發行 送料三錢

著者 東京市王子區下十條仲町一〇四一
安谷 宗虔

發行者 東京市麴町區丸ノ内二ノ六
加瀬 喜一郎

印刷者 東京市淺草區清川町二ノ八
庭野 民一

印刷所 東京市淺草區清川町二ノ八
大耕社印刷所

發行所 東京市麴町區丸ノ内二正
ノ六・八重洲ビル四階 信同愛會
振替東京四一〇一一番
電話丸ノ内五三一四番